明治三十四年 徳富蘆花『思出の記』 第一章 波瀾万丈自伝小 説

序にかえて

れたごとくこの種の「物語」にはまってしまった一作と遭遇のスケッチからはじめようとおもう。 おもしろさを語ってみたい。ただし、プロローグとしてまずは、わたし自身が突然雷鳴にでもうた てみたらば、読んでびっくりみて感激、こんなにワクワクおもしろい「物語」だらけだったなんて。 ジャンル、いまや概説書やあらすじ本だらけなんだが、きくとみるとでは大違い。実際に手にとっ い(その意味で忘れ去られたといってよい)、主として小説作品に区分される近代日本の「物語」の 明治の文学なんて古くさい、カビくさい、ムツカシイ……。とんでもない! ということで、これからわたしは、書名だけは知られているんだが、実はほとんど読まれていな ご承知のとおりこの

えてから、ようやく関連本へ手をつけるようになったのだった。 百冊超となる。だからテキストの蒐集にもそれなりの時間がかかって、ある程度、その中身をおさ き『近世日本国民史』だけでも優に百巻を数えるが、それ以外に単行本として刊行されたものが二 その蘇峰、ごぞんじのとおりタイヘンな多作家である。なにしろ、そのライフワークともいうべ しの本読みのテーマは、歴史家としての徳富蘇峰

昭和の末期で、江戸時代幕末と明治の思想書や歴史書を読みあさっていたころだった。往時わた

に忘れられない いる)。 本の自伝小説 とえば戦前の改造社版 健次郎)の著作へ接するようになったのも、このプロセスである。さしあたって購読したのは、 ○年。これも全二十巻のワンセット一万円もしなかった!)第六巻収録のヴァージョンで一読した そのなかでいまも心ときめく初恋みたいに、 『富士』(同)なんかがその一例だった(どれも驚くほど安い古書価格だったのを憶えて のが、 やはり戦前刊行の新潮社製本、 『徳富蘆花集』(一九二八年)とか、オリジナル版では福永書店から出た四 いや、 蘆花全集刊行会版 たしかにある種の強烈な「初恋」として絶対 『蘆花全集』(一九二八~三 思

明治のベストセラー作家で、たぶん一般にはその蘇峰よりも有名だろうかれの実弟、

蘆花

(徳富

手がとまらない小説!

出

[の記] となる。

き入れられるようにおもしろい。かねて愛読の松本なぜかのっけからまったく別物だった。いきなり引ったけれど、当初はそれだけのこと。ところがこれ、本は蘇峰を知るためで、むろんそれなりに役には立どんなしだいで、というとそもそもおよそ蘆花の

円のエンディングのあたりなど、イイ年をした大の男がオイオイとだ。

る。ついでにその先の奥付の最終頁を開くと、余白へ鉛筆で読了した日付に「何年ぶりか! 楽: の巻を手にとってみれば、目頭がいたくかすんだあたりは、アチコチにびっくりマークがついてい われしらず、菊池慎太郎という「物語」の主人公へすっかり感情移入していたのだった。

楽、

楽。☆小説、

小説、

小説。」なんて記されてもいる。

記』はつまり、 たしの近代文学への偏見も吹き飛んだようにもおもえ、ほとんど小踊りしたかったほど。『思出の が割れたとでもいうのか、これで、それまでなんとなく教科書で習うものくらいに考えていた、 なクラシック・ブックのひとつである。それを終始新鮮な感嘆と愉悦をもって読了できたのだ。 ければ冒険活劇でもミステリーでもない。古めかしくも日本的な青春小説であり、まことに明治的 むろん大ヒット文学なんだから読ませる名品ではあったんだろう。だがこれは、歴史小説でもな わたしにとって明治の「物語」の福音というか、記念すべきマイルストーンとなっ

るとして、以下そのことをのべてみる。ただしそのまえに、書誌的なこともちょっと。 たか。蘆花の生い立ちや文学的業績の詳細は、あらためて採りあげるつもりの さて、ならばこの「物語」、いったいどんなところが、またどんなわけでそんなにおもしろかっ 『不如帰』の項へ譲

たのである。

蘆花

(熊次)

がここで『思出の記』

を「面白い読物」と語

っているのは、

まことにしかり

連載 グヒット は る昭和二(一九二七)年には「百四十五版!」を重ねていたというんだから、 『思出 思出 り蘇 開 田の記 始。 峰 の記』の初出は、蘆花の兄蘇峰経営の『国民新聞』で、明治三十三(一九〇〇)年三月から ・ノベルといってよ 主宰の民友社より単行本となっている(なお、 は刊本化のさいに改題されたもの)。 いくどか休載があったものの、 W 翌年三月に完結している。それからほぼ二カ 以後たちまち増刷また増刷の連続で、 新聞連載時のタイトルは「おもひでの たしかに時代のロン 蘆花が亡くな 7月後、 記

作家として文名赤マル急上昇のころに発表の作品ともいえる。 で間髪を入れず飛びついた前年刊行の『不如帰』の好評および大ヒット直後のこと。 執筆が開始されたのは、 蘆花が満三十一歳のときで、 わたしがこの 「物語 の強烈なインパ よって、 クト

己のあるものを語るべく『思出の記』を書いた。(中略) あるものを取り入れ、人物事物さまゞの思出の上澄みを軽くすくひ上げて、気軽に面白 巻でこんなふうに語っている。すなわち、 後年蘆花が 作家が世に認められて自信が裏書きされると、 たし。 ついでに、 『思出 作者におけるこの の記』と異なる、 「物語」の着想と創作の淵源についてもふれておこう。 ほとんど告白小説的な自伝『富士』(一九二八~三〇年) 菊池慎太郎ならぬ「熊次」を作中のナレーターとして、 必ず自己を語る、 熊次は自己のあるものを遊 といふ常例に漏 n ず、 この 熊次は自 点は 兄の

のべておくと、実にその「読物」という一語に集約されるんだから。 というものだろう。というのも、あらかじめわたしのこの「物語」に痺れまくった要因のひとつを

語りの妙と自然の美

おこう。 がたちまち発熱没入のオープニングの「一の巻」にスポットをあて、そのナラティヴの特徴をみて ではつぎに、一の巻から十の巻(プラス、プロローグにあたる「巻外」)の章立てのうち、こちら

父親の親戚への連帯保証のハンコがもとで破産。しかもほどなくその父が失意のうちに亡くなって 設定のかれの家は、水のきれいな地方なので造り酒屋をやっている豪家とあるが、これがしかし、 作者そのままで九州中部 主人公は、上述のとおり蘆花その人を擬した明治元(一八六八)年生まれの菊池慎太郎。生地も (肥後) なんだが、地名は妻籠という架空の町になっている。一人っ子に

東に一峰孤立してそびえる「高鞍山」や水の清さと稲の美しさだ。すなわち、「実に見せたいです の年からはじまっている。そのころのことで思い出すのは、いつだって故郷妻籠の景色で、ことに П 蛙の声を踏分けて一村総出の田植時、早乙女の白手拭いがひらりくくと風に靡いて、畦に田植 .想譚スタイルの「物語」は、劈頭、慎太郎の「吾」というものが頭にぼんやりと宿った十一歳 おまけに、

その井戸へ転落のわが家へ、

歌の流るゝ頃の賑合を」という具合で。

宗々、洒々、滾々の音が聞える」ことで、だから「今でも夏になると、僕は一入故郷を忍ぶ」と、 このように初手から自然に感情を与えてうたいあげるような蘆花得意の筆致である。 と冷たく、玉と澄んで居る」水も忘れられない。つまり「四方の山から源泉滾々として絶えず湧出 づる清水は、 それから「高鞍山の頂辺と思ふあたりからすばらしい虹の立つ」炎天下の夕立、 縦横に小さな流れをなして、鮎はしる二つの川に落ち合ふ。何處に行っても、 田川の「実に氷

韓論 やめ、雇人を減らす一家破産という「カタストロフイ」に見舞われたからであった。 しかしいつまでも花と清水を見て暮らす世ではない。山を売り、 の破裂いらい世はとかく物騒になり、佐賀秋月の乱、 神風連の暴挙、それよりも恐ろしかった 田を売り、 道具を売り、 明治六年の征 酒

明治十年の乱のころまで幸福だったという慎太郎は、

かく嘆く。

もので、 が「慎公」とか「菊池」とか呼び捨てにする。もがいても、あがいても、田舎は深 るなあ?』と怒鳴られる」。「坊ちやま」「慎さま」とかはやしたてていた裏の田 Š ればまだしも、 御 何 がつらいといって「零落」ほどつらいものはない。東京みたいに人が桶のなかの芋のごとくい 度落ちたら容易に上がれ 田舎では実にたまらない。「昨日迄は、隣の梅の花を折つても、『坊ちやま、 私が折つて上げませう』と云はれたのが、今日は ない。 『何処の餓鬼だ、 小 人の麦畑歩 13 作の小倅までも 井戸のような 御危な

金満家の無血無情の叔父が乗り込んできて、亡き父の家

母が、 前にこの刀で「死なんか」と叫ぶかの芝居がかった張扇の説教シーンとなるんだが、この段、 秀者だった慎太郎は、いまでいう不登校となり、だんだんグレだす。かくてやはり豪家出の気丈の 屋敷も乗っ取られ、村人の有意無意の迫害もいっそうとなる。それで、ずっと小学校イチの成績優 水呑み百姓になって、 短刀片手に家代々の墓場へかれを引っ張りだし、おまえのいまの様は何だ、水呑み百姓と遊 一生腐って死ぬつもりか。ならば母も死ぬから、 おまえもご先祖 あま

りに有名なんで(とおもう)、割愛。

ては、 焼きの往来に論語を懐中して「子 曰」を誦しつつ、毎度生椎茸や蕨、 である。 ときから「老牛が犢を舐るが如くに」愛してくれた、黒痘痕顔の二十年来の下女お重もそのひとり た、慎太郎が大好きな新吾という炭馬引きの若者もそれである。この新吾は変わり者で、山道の炭 と思つておいでなさるか」と生まれて初めて怒り出し、ほとんど腕力で踏みとどまった下女だ。ま の娘で、没落以前は大の仲良しだった一歳年下の「芳ちやん」が、そのひとり。慎太郎の生まれた アに人が如何したつて構うもんか、エライひとになつて皆にお辞儀させて御遣んなさい」 他方で、迫害するものがあれば、「零落」した後も一家を慕う例外もある。 慎太郎へいつもいつも口にする。「坊ちやん、エライ人に御なんなさい、 なにしろ、大勢の雇人へ破産で給金が支払えんと暇を出したおり、「旦那様あ此重を畜生 自然藷を手土産にやってき 家を乗っ取 御なんなさい、 った叔父

チ目をしばたたきたくなる。イヤハヤ明治だなあとため息をつく。それがさらに「一の巻」のラ

ここまでふり返っただけで、わたしはかつての初読のときとまったく同じく、なんだか

杉原志啓 (すぎはら・ゆきひろ)

1951年山形県生まれ。学習院大学大学院政治学研究科博士課程修了。音楽評論家。現在学習院女子大学講師(日本政治思想史専攻)。著書『蘇峰と「近世日本国民史」――「大記者」の修史事業』(都市出版)、『おもしろい歴史物語を読もう』(NTT出版)。訳書:ビン・シン著『評伝徳富蘇峰』(岩波書店)。共著『新地球日本史』(サンケイ出版サービス)、編著『坂本多加雄選集』 I、II(藤原書店)、『稀代のジャーナリスト 徳富蘇峰』(藤原書店)。音楽著書『音楽幸福論』(学習研究社)、『音楽の記憶』(アーツアンドクラフツ)。音楽訳書:ポール・M・サモン編『エルヴィスとは誰か』(音楽之友社)。音楽共著『イチローと村上春樹は、いつビートルズを聴いたか』(PHP 研究所) 他。各種論壇誌、音楽誌に多数寄稿

波瀾万丈の明治小説

2018 年 6 月 10 日 初版第 1 刷印刷 2018 年 6 月 20 日 初版第 1 刷発行

著 者 杉原志啓

発行人 森下紀夫

発行所 論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル 2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀/奥定泰之

印刷・製本/中央精版印刷

組版/フレックスアート

ISBN 978-4-8460-1690-6 © Yukihiro Sugihara 2018, printed in Japan 落丁・乱丁本はお取り替えいたします。